

20. 胆汁酸測定に関する臨床的検討

熊田 卓 中野 哲 北村 公男
 綿引 元 武田 功 小沢 洋
 浜野 博次 杉山 恵一 (大垣市民病院・2内)
 金森 勇雄 松尾 定雄 樋口ちづ子
 木村 得次 市川 秀雄 安田 鋭介
 (同・特殊放射線センター)
 佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

コール酸‘榮研’RIA キット (榮研化学 K.K) を用いてセルレインを 0.2 μ g/kg 筋注する内因性胆汁酸負荷試験を行い、次の結果を得た。対象は正常8例、組織学的に診断のついた慢性肝炎8例、肝硬変11例であった。

1) 空腹時胆汁酸値はビリルビン、ICG.R¹⁵ と有意の正の相関 ($p < 0.01$) を示したが、他の肝機能検査法とは相関は見られなかった。

2) 肝硬変例では、血中胆汁酸値が慢性肝炎や正常者とくらべて有意に高値 ($p < 0.01$) で、特に非代償性肝硬変ではこの傾向は著明となった。

3) 非代償性肝硬変や食道静脈瘤を有する症例では、胆汁酸負荷曲線は高値でしかも2峰性の pattern をとる例が多く、その理由として肝細胞障害以外に肝内 shunt の要素が推定された。

これらの検査は従来の肝機能検査上障害が軽度となった時期に行われており、この意味からもセルレインを用いた胆汁酸負荷試験は慢性肝障害の程度の診断に有力な情報を与える検査法と考えられた。

21. CEA-RIA キットの基礎的検討

松尾 定雄 金森 勇雄 市川 秀男
 安田 鋭介 木村 得次 樋口ちづ子
 (大垣市民病院・特殊放射線センター)
 中野 哲 北村 公男 綿引 元
 武田 功 小沢 洋 熊田 卓
 浜野 博次 杉山 恵一
 (同・2内)
 佐々木常雄 石口 恒男 (名大・放)

今回我々は前回当学会で発表した基礎的検討に引き続いて、各社の CEA キットの相関を中心に検討を加えたので報告した。

結果

1. セファデックス G 50 カラムによる CEA

抽出と酢酸緩衝液 (PCA) の溶出パターンは規定量の PCA で十分 CEA が抽出された。又、カラム洗浄は PCA 量として 30 ml 以上であればカラム内の PH 値は使用前と同値に回復した。

2. 各社キット間での相関

Roche と Dainabot キットの相関は $r=0.801$ ($n=61$)、Roche と CIS キットとの相関は、 $r=0.798$ ($n=71$)、CIS と Dainabotr キットの相関は $n=0.761$ ($n=68$) といずれも正の有意な相関が得られた。

3. 健常者の血清 CEA 値

Dainabot キットによる正常値はすでに報告しているので今回は Roche キットについて検討した。男性 ($n=31$) 3.3 ± 0.97 ng/ml、女性 ($n=50$) 2.7 ± 1.1 ng/ml、全体 ($n=81$) では 2.95 ± 2.22 ng/ml であり、男女間の有意差は認めなかった。

4. 悪性及び良性疾患患者における血清 CEA 値

Roche キットで 5 ng/ml 以上の異常値は悪性疾患 51 例では 19 例 37% が陽性を示した。その内訳は胃癌 50%、大腸、直腸癌 64%、原発性肝癌 40%、一方、良性疾患においても 20 例では 5 例 25% が陽性で、評価には喫煙、年齢の関係を考慮すべきものとする。

22. 冠動脈疾患におけるペルサンチン負荷タリウム心筋シンチグラフィ

二谷 立介 瀬戸 光 柿下 正雄
 羽田 陸朗 石崎 良夫 清水美恵子
 (富山医大・放)
 寺田 康人 杉本 恒明 (同・2内)

冠動脈疾患が疑われ、冠動脈撮影の施行された 24 例に、ペルサンチン負荷タリウム心筋シンチグラフィを施行し、その所見を検討した。ペルサンチン 0.142 mg/kg/min を 4 分間静注し、その 4 分後に塩化タリウム 2 mCi を静注した。10 分後より前面、左前斜位 25°、45°、65°、左側面の 5 方向撮像した。これらの像で欠損を認めるか、疑うかした際には 4 時間以後に再分布像を追加した。またペルサンチン静注時より 1 分間毎に血圧、心電図を記録した。

24 例中 18 例に冠動脈撮影で 50% 以上の狭窄を認めた。6 例は冠動脈は正常だった。狭窄のある 18 例中 13 例 (72%) にシンチグラム上その血管の支配領域に一致する